

被支援経験者の視点から見る支援のあり方

—私にとっての総合活動型日本語教育とは何か—

林 逸菁

0. はじめに

三ヶ月の総合実践を通じて、総合への捉え方や総合における支援のあり方などについていろいろ改めて考えさせられた。このレポートはその考えの変化のプロセスを記するものである。

1. 動機と仮説

私は以前「日本事情・言語文化」の授業を履修したことがある。その授業活動の中、私を含めてクラスの履修生たちの顔つきと距離は授業が重なるにつれて変わってきた。みんなが無関心の表情から生き生きとした顔になり、お互いの距離はぐっと縮んだ。その変化は学習のモチベーションの高まりへと繋がった。それは言語習得を促進させる一つの大事な活性剤であると思っただ。この発見は日本語教育経験ゼロの私の中では大きく響いた。教室はただ何かを学習させる場所ではなく、人と人の付き合いが深まり、お互い影響し合う、学習者の心を動かす場所でもある。教師はそのような環境作りは何よりも大事だと思った。

人の心を動かせる授業を目指すために、今回は学習者のレポートの執筆活動を支援するという役目のサポーターとして総合3-6クラスに入った。そして、総合活動型日本語教育ではサポーターの支援はどのようなことであるのかを考え始めた。このように考えていると、私なりに認識している「支援のあり方」は問題の中心となってくる。私が認識している支援のあり方は、以前履修した「日本文化・日本事情」の授業の経験に基づくものであり、上の立場から下のものを助けるのではなく、学習者と平等でありながら第三者の立場で客観的に学習者同士のインターアクションを促進させるという役割を果たすことである。サポーターが第三者の立場であっても、学習者同士のインターアクションを優先した上で、自分の考えを出したりして、学習者たちの議論にも入り、みんなで話し合ううちに、サポーターも学習者もそれぞれの身分の境目がなくなるほど平等で親密な関係を築き、一つの共同体となる。これが私なりに描いた総合活動型日本語教育の理想図である。

今回の総合3-6クラスでは、サポーターは何人もいるので、支援のあり方に関する認識・定義はそれぞれ異なっているだろうと思う。そうすると、学習者をいかに上手く支援するために、サポーターたちの協調的なチームワークができるのかは非常に大事に関わってくるといえる。このよう

に、私にとっての総合活動型日本語教育を、学習者もサポーターもみんなが一つとなり、同じ目標に向かって共同活動をするうちに、お互いの付き合いが深まり、影響し合いながら、言語習得のみならず、人間関係、自分への認識、考えの確立なども成長していく場として捉えたいと思う。

2. 対話

2. 1. 対話の相手を選んだ理由

私はディスカッションの相手に総合実践を履修した経験がある Y さんを選んだ。Y さんを選んだ理由は二つある。一つ目は、Y さんが体験した総合クラスは、私が以前履修した「日本事情・言語文化」のクラスと同じ、学習者同士のインターアクションが中心となる活動が行われている環境だったからである。そのような環境で支援を行っていた Y さんと話すことで、私が経験した支援との相違点が出てくるのではないかと考えた。二つ目は、Y さんが体験した総合クラスは、学習者同士のインターアクションが中心であることに反して、私が今履修している実践の総合クラスは、学習者とサポーターとのインターアクションが中心となる傾向があるからである。このような環境の中で支援を観察している私は、Y さんと、それぞれの異なった視点から支援について対話したいと考えた。

2. 2. 親密な関係と慣れあいの危険性

私は Y さんに「日本事情・言語文化」を履修した経験を語り、そして、Y さんは総合実践の経験話を話してくれた。Y さんのグループでは、自発的な意見を言わずにずっと黙っていた学習者や他人の意見・コメントを取り入れない学習者がいたこと、課題提出の締め切りを守らなく、活動が重なっていくとしても状況が変わらなかつたことなどの問題があった。これらの問題点はクラスのメンバーの関係が親密になることによってお互いにプラスに影響をし合っているという私の予想に反した。そこで、私は Y さんに学習者同士の関係とインターアクションについて聞いてみた。

Y: 学習者同士は、和気藹々仲良く授業を楽しんでいたが、逆にレポートの活動に慣れあっているというのを常々感じていた。確かに学習者が一生懸命書いてきたし、話し合いのときもそれなりの意見を言っていたが、グループの全体で流れている慣れあいの雰囲気というのは私拭きできなかった。しかし、最後の総合評価では、他のグループと評価しあうときに、逆にみんなが真剣になったので、すごくよかった。だから、ある意味の良い緊張感が必要だと思った。

L: 学習者に自由に発話できる場所を提供するのは大事だが、講義形式で授業をやってきた受身の学習者に対して、最初から教師、それかサポーターが発話順を振ったりし、ある程度その場をコントロールしたりする必要があると私は思う。

Y: 時間を守る、提出の締め切りを守るといった規律を守ってほしいことを最初から強く示す必要がある。教室かつ学校場面で活動している限りは、学生としての基本の規律というものは絶対必要だと考えている。一つの目標に向かってみんなが頑張っていく教室にしない限り、慣れあいになるという危険性も大きいし、この活動の意味がなくなるのではないかと考えている。

L: Yさんの経験を聞いて、学習者同士の親密な関係を構築することは、一つのプラスαとなるが、それだけで必ずしもクラス全体を良い方向に向けられるわけでもないと思った。親密な関係の中で、慣れあってしまう危険性もあることがわかった。慣れあいのような雰囲気の流れないように、学習者にある程度の緊張感を与えることは大事だと思った。

Y: 学習者は働きかけによって変わる。誰か変われば、それで学習者同士間また影響し合える。だから「働きかけ」の方法は大切だと思っている。学習者同士の関係が親しくなることは大前提としてあったほうがいい。それからもう一歩、本当に意味のある活動というところは問題だと思っている。そこで、クラスの運営の仕方に非常に重要だと思っている。

Yさんの話の中、学習者同士の親密な関係の中で、慣れあってしまう危険性もあるということが一番印象的だった。そして、私は慣れあいの雰囲気に流れないため、何をしたらいいのかを考え始めた。Yさんは学習者に守ってほしい規律を最初から強く示すことが大切だと言った。ここでは、私はYさんの意見に同意し、教室において学生は学生の基本の役割を果たすべき、教師は学生の規範を管理する権利があるというふうに、教室場面における教師・学生の立場を捉えていた。

2. 3. 学習者主体のクラスにおける学習者の自己責任

Yさんと話したあと、私はYさんの考えを納得して、学習者に皆認識されているルールをあらかじめ提示する必要があると思った。しかし、総合実践の授業での議論を通して、私は初めて総合クラスの設計として、学習者の自己責任というものが組み込まれていることを知った。総合は学習者主体のクラスであって、学習者が教師やサポーターの言うことに従うのではなく、自らやっていくということが望ましいのである。そこで学習者の自己責任が問われ、学習者の自己責任がないと、クラス活動が崩壊することになるそうだ。この話をYさんに話すと、

Y: 自己責任というスタンスでやるんだったら、関わる側としてある程度無責任に、それは自己責任だから仕方がないです、と私も言っちゃっていいのかなと思うけど。教師はどれくらいサポートしていくかというので、総合の形で考えれば、全体を作り上げていくというのが一番望ましい形だと思う。リー

ダーとかはうまく話を円滑進めて行けば、それで一番いいと思うけど。そうじゃない場合、ある程度私はその部分を引っ張るとかということが必要になってくるんじゃないのかなと思う。

Yさんは学習者の自己責任に任せることは、教師(サポーター)側の責任を放棄することになると考えているようである。また、学習者の自己責任を前提としている学習者主体クラスという考えに賛成できないようだ。それで、Yさんに学習者主体のクラスについてどう考えるのかを聞いてみた。

Y: まず学習者がそこでこれをやろうという気持ちがないとだめだよ。それがなかったら、学習者主体は絶対成り立たないんじゃないのかなと思う。最初その気になっていなくても、うまい持っていき方で学習者が乗ってくる場合もあると思うね。(それは示したもので、最初だけ示してあげれば、後はたぶん学習者たちが自分たちで積極的に動いていく。)

L: そうだね。総合の授業は従来の授業のやり方と違うから、すんなりと受け入れる人もいれば、抵抗感を感じる人もいると思う。だから最初は教師なりサポーターなりの道案内の人が必要だと思う。そして、もしクラスで学習者の中で一人か二人ができれば、やっぱ他の人もその人たちに真似して、見習うよね。

Y: 学習者の中で一人か二人が周りを引っ張っていくことがあると思うけど、そこから漏れる学習者も絶対いるよね。私が入ったグループではそういう状況だったから、だからその規律じゃないけど、そこから辺から変えていくことで、学習者にもう少し緊張感が生まれるんじゃないのかなと思う。

Yさんは意味のある活動を持っていくために、学習者の自己責任を問うことより、教師側は何らかの形で学習者を引っ張ったりする必要があると考えているようだ。このことから、Yさんが教師かサポーターかとしての責任を執着しているような印象を強く受けた。一方、私は学習者主体クラスにおいて学習者の自己責任が問われることが理解できるが、それを全部受け止めることはまだできない。

L: 私もよくわからないけど、自己責任は、最初から持っている人もいれば、この活動を通して養うんじゃないかなと思うけど。だから最初から自己責任がない人はもうこの活動ができなくなると言われると、なんかみんなが最初から自己責任ができるわけではないじゃんと言いたくなる。

Y: だからそれが出てくるように、やっぱこっちはある程度働きかけなきゃいけないんだよね。何も言わずにほったらかしにしておいて、それでオーケーじゃないでしょうというような気がする。私はやっぱそこに返ってしまうわけ。活動をよりいいものにしていくためには、できてないものはちょっと

働きかけないとだめじゃないのかな。なるべく自己責任がある人を生かしながら、ない人は出るような形にするためにも、やはり働きかけるといのは必要だと思う。

私も Y さんも学習者の自己責任はクラス活動を通して養うものだと考えている。Y さんが言った「自己責任がある人を生かしながら、ない人は出るような形にするためにも働きかける必要がある」ということは確かだと思う。しかし、学習者に自己責任があるかどうかを教師側は見極めることができるのかに疑問を感じた。ここで、私は自分にとって自己責任とは何かを考えてみた。それはクラスメートの授業の取り組み方に影響されたり、その教室活動への捉え方が変わったりすることなどによって、常に変化するものである。学習者の自己責任が絶対的なものではなく、相対的なものなので、活動の最初から何かを守ってほしいと提示することは不可能であろう。だから、学習者主体のクラスにおいて、教師は学習者の自己責任を養う環境を提供することができるが、学習者に自己責任が生まれるように働きかけることができないのではないかと考えた。これで、私は学習者主体クラスでは学習者の自己責任が前提とされることを、ようやく受け止めるようになった気がする。

2. 4. 総合活動型日本語教育における支援について

ここでは、私は学習者として経験した「言語・文化」では、なぜクラスの皆さんが活動の中で徐々にいい味を見せてくれたのかを考えてみた。それはクラスの中で最初から自分のやる気を見せる人がいたからだと思う。つまり、どのくらい自分が自己責任を働かせて、その自己責任を果たす姿勢はどのくらいクラスの中で影響を及ぶのかは一番原因だと思う。そこで、うまく動いたのはサポーターが何かを支援してくれたからではなく、サポーターも含めてそのクラスのメンバー達がお互いに影響し合った結果だと思う。この話を Y さんに話したら、

Y: 私はそれも大切だと思うね。だからある程度、最初から学習者の気持ちが育つような形でのサポートをしていくべきなのではないかと少し思うんだけど。本当にこの活動で何をするのかはわかってない人も結構いるよね。最初の頃はそれに伴う責任とか、そこまでみんな考えてないでしょう。確かに説明してもわからないところがあるのはあると思うけど。

L: この問題は総合クラスを検討するときにも出てきた。学習者は総合活動の意味がわからなく、苦しんでより、最初からこの活動の意味を説明してあげれば、活動をスムーズにやっているのではないかと意見があった。私も最初この意見に同感したが、この活動の意味は、やはり言葉の説明で教えられないんじゃないのかなと思う。結局この活動の意味は、この活動を一通りやってから、自分を振り返ってみるときに、この活動の意義を自分で捉えるしかないと思う。最初からこういう意義を学習者に教えるのが私は無理だと思う。やっぱり人それぞれの捉え方が違うし、この活動の意義はいろんな可能性があるから、最初から提示することはできない。

今までの対話から、Yさんは教師の立場として、学習者の自己責任を求めるというより、学習者へ有効な働きかけは大切だと思っていることが伺える。それで、Yさんに総合における支援をどのように考えるのかを聞いてみた。

Y:学習者たちが主体的に動いているのはリーダーなりサポーターなりそこら辺の力はすごく大きいんじゃないのかと感じた。リーダーなりサポーターなりの持っていき方、何もしてないように見えるかもしれないけど、学習者がそこに関わっていくという方向に持っていくのは、グループを運営することは本当に大変なこと。

L:それは、どれくらいこの活動を一つの共同体として見ているか、どれくらい自分の力を尽くすか。サポーターすることだけでなく、本当に真剣にこの活動のメンバーと関わっていこうという。質問する、コメントするなど大事だけど、その上にこの人たちとの関わりに自分が真剣になっているという姿勢を見せるというのが私はすごく大事だと思う。そうすると、ここはただ勉強の場だけでなく、一つのコミュニティーなのだ、この人になら何も言える、自由に発言できる、そういう気持ちを学習者に持たせることは可能だと思う。サポートのやり方以上、心の問題がある。だから、総合は人の心を動かせる力があるんじゃないのかなと思う。

Yさんとサポーターの支援について話しながら、自分が「言語・文化」を履修したときのことを思い出した。そのとき、私がサポーターとしてクラスに入ってきた院生にサポートしてもらったという感覚は全然なかった。私にとってその院生がただ仲間の一人だという存在だった。このことから、方法論レベルで支援を考えるより、この総合の場を一つのコミュニティーとして見なして参加する自分の姿勢を見直す必要があると私は考えた。つまり、人を動かそうとする前、自分がどのように動きたいのかを考えることはもつともである。そこで、学習者はどのような姿勢で授業に取り組むのかは学習者の自己責任だが、サポーター側も自分の自己責任を働かせて、それを学習者に見せることによって、学習者に働きかけることになるのではないかと私は思う。私が考える総合の場は学習者を学習者として見なすのではなく、一人の人間として見なすため、様々な人との出会いの中で、自分がその人たちにどのくらい影響を与えるのか、自分と勝負していくことは一番の課題だと思う。問題を想定して解決しようと思ったら、終わりが無いだろうと思う。

2. 5. 教室場面における教師の役割・責任

今までYさんとの対話から、Yさんは教室における教師の役割について固い信念を持っていると見受けられる。それで、もし自分の教室を持てるとすれば、それをどのような教室にしたいか、また教室における教師の役割についてYさんに聞いてみようと思った。

L: Yさんにとっての理想な教室とは？

Y: やっぱり実践をすぐ考えちゃうから、なかなか現実を切り離して考えるのは非常に難しいのかな。理想といえば、学習者同士が学び合うのは私にとって一番の理想。教師が一方向的に教えるのではなく、学習者お互いに持っているものを出し合って、学んでいく状況が一番習得促進されるかな。例えば、グループがあって、その中に日本語がよくしゃべる人としゃべらない人がいて、グループに参加することによって、この人はこの人なりの学び方があると思う。しゃべらないひとだって、強い部分あるだろうし、他の人が持っていない部分を持っていることあるし、だから、そこらへを出すことによって、日本語に付随するもの、日本語だけじゃないものだっていっぱいあるし、そういうところはうまく調和されていくようなものが望ましいかな。つまり、ことばじゃないもののやりとりがそこで行われる可能性がある。すごく抽象的だけど。

この話を聞くと、Yさんが考える理想的な教室は学習者主体クラスともいえると思う。しかし、Yさんが考えている学習者主体クラスは総合の学習者主体クラスと少し違う気がする。何か違うというと、総合のいう学習者主体クラスには学習者の自己責任が必要とされているのに対して、Yさんは学習者主体クラスをさせるために、学習者の自己責任に任せるより、教師が注意する、提示する必要があると考えている。なぜYさんが教師として、引っ張ったりするなどの役割を果たさなければいけないと思っているかを問うと、

Y: それはやはり責任としてあるじゃないのかな。じゃ、何でもいいですじゃだめだと思うね。だって教室の中に教師という立場で入るよね。もちろん学習者同士が相互にやってくれればそれがいいんだけど、そういう環境を作り出してあげなきゃいけないわけだね。少しでも学習者が真剣に取り組めるような場を、こっちとして作り出す必要があるじゃないのかな。

L: Yさんにとっての教師の責任とは？

Y: 学びのある場を作り出すこと。じゃ、一応こういうことでクラスはあれでしました、後は自分たちでどうぞ、じゃ困るでしょう。教師は責任を放棄しているよね。じゃ、教師がいないのはいいのかな。じゃ、なんのために教師がいるの？

L: 教室に教師がいるのは、理念を言う、そのまま自分の理念を言うんじゃなく、例えば、今の細川先生の総合だと、相互評価の三つの基準、それを見る目を持つようにさせるために、活動を繰り返している。それはある意味では教師が自分の理念をずっと学習者によびかけている。そこで出てきた問題を解決するように努力するけど、一番メインなのは教師が自分の理念を学習者に浸透させるために、教室の活動を通して学習者に呼びかける、働きかけることだと思う。それとYさんが考えている教師の責任とはちょっと違うかな。

Y: いや、わからないけど、繰り返しは学習者に浸透していくための状況も必要なわけでしょう。いくらこっちから働きかけても、学習者がとるかからないかわからない。だから学習者がとりやすいような状況を作り出すことも大切。

L: じゃ、教師の責任は学びの場を作ることとしたら、教師の立場とは？

Y: 仕方がないよね。そういう立場というのが最初からあるわけだから。だって学習者として教室に入っているわけじゃないよね。だってお金もらっているわけだし、最初からもう立場が違う、それは当然なことなんだけど。学習者じゃない。教室場面というのは、教師がいるのが前提だよ。私が教師という立場で入ると、もう教室という立場が存在する。それでどうしてもそういうのが教室に存在してしまう。その教室の中でやっぱりならなきゃいけないことがあるはずでしょ。

L: やらなきゃいけないことはどういうこと？

Y: 学習者が学習すること。じゃ、教室を通わなければ、別に家で勉強してもいいわけじゃん。

最初、Y さんとの対話の中、学習者に最初から規律みたいなものを提示したりすることは教師側としてやるべき責任であり、学習者側も従うべき義務だと思った。Y さんとの対話、また実践授業の議論によって、私の考えた方は変わった。最初、私は Y さんと同じように考えていたのは、教師—学習者のあるべき立場という従来の固定観念が頭の中に植えついたからだ。今は総合活動型における教師と学習者の関係は、教える側と学ぶ側との関係ではなく、教師も学習者もお互いに学び合うというふうに捉えているのではないかと思うようになった。

対話において Y さんは教師の責任は学びの場を作り出すことだと言っているが、教室の場では学習者が学習するという Y さんの考えから、Y さんは教師が学習者を学習させる責任があるというニュアンスが読取れる。しかし、学習者主体のクラスは学習者が自ら学習したいことは望ましいと私は理解している。結局学習者に学習させるという教師の責任感というのは、教師が教室の場をコントロールする意欲の表しなのではないかと考えられる。そこで、Y さんは学習者の自己責任が問われる学習者主体クラスは、教師の責任を放棄したように見えたからなのではないか。このように私は従来の教師対学習者の固定観念から解放された気がする。

3. 結論

この三ヶ月にわたって、Y さんとの対話し、自分に向き合って考えることによって、揺れた自分の立場が徐々に安定してきて、そして新たな立場が形成され、固められた。

最初、私は自分が立てた仮説に確信を持っていた。人と人の親密な関係は何よりも大事だと思った。しかし、Y さんとの対話を通して、慣れあいに流れてしまう可能性を知り、それを防ぐために、教師(サポーター)側は力を入れるべきだと思った。それは私の中に教師権威という考え方が植えついたこと

に気づき、学習者の自己責任は絶対的なものでなく、相対的に変化するものであり、教師側から要求できるものじゃないと悟った。また、Yさんとの対話からYさんの強い教師観が伺い、その裏にある背景を探っているうちに、私もYさんと同じように、学習者が学習すべき、教師が学習者に学習させるべきだという固定観念を持っていることを発覚した。この気づきから、総合の場に参加するメンバーは、学習させる人でも学習させられる人でもない、教師(サポーター)も学習者もお互いに学び合っていくのではないかと考えるようになった。

このように考えると、私が考える総合における支援のあり方も変わってきた。サポーター側としては、いかに学習者に有効に働きかけるかということより、いかに自分の自己責任を働かせることのほうが大事だと私は今思う。結局、総合の場では、学習者の自己責任だけでなく、サポーターの自己責任も問われる必要があると思う。それは、私の動機に書いたように、総合ではサポーターも学習者もそれぞれの身分の境目がなくなり、一つの共同体となるからである。総合を一つの共同体として参加するメンバー達は、お互いに影響し合うために、自分なりに考えた責任を果たし、自分の力を尽くすことはまず第一歩だと思う。そこで、私が今考えている総合の支援というのは、一人の人間として、総合というコミュニティに入って、そのコミュニティに参加する人たちを助けるのではなく、その人たちと一緒に学び合っていくことと、コミュニティの一員として、そのメンバーと自分が真剣に関わっていく姿勢を見せ、自分の自己責任を働かせることによって、コミュニティの中の人たちに何らかの影響を与えて、発信していくことだと捉えなおした。

もう一つ自分の中に揺れがあったのは総合への捉え方である。Yさんとの対話と授業中の議論がきっかけで、私はかつて履修した総合の授業を振り返って、学習者の立場だった自分がどのように総合の授業を捉えたのかを思い出してみた。授業活動の間に私は総合で何が求められているのかをずっと戸惑っていたが、活動の最後は私なりに総合活動の意義を見出した。つまり、活動の間に私が考えた総合の意義は中間的なものであり、活動の最後に出した意義は最終的に考えたものなので、私の総合への捉え方はずっと変化していた。また、私が総合を捉える際に、「自分」には何か意義があったのかを考えるため、自分ではない他人(教師も含める)と違う捉え方をするのが当然だと考えられる。そうすると、学習者が総合をどのように捉えているのかについて、学習者の一人一人が時間をかけて考えていく問題なので、教師やサポートの我々から、総合という授業は何々を日指しているよということを学習者に説明するより、学習者自身が全部の活動を通してから、自分なりに総合を捉えるしかないと言えるのではないかと思う。

そこで、もう一回私にとっての総合型日本語教育とは何かを問うと、答えは動機の仮説と変わらない。学習者もサポーターもみんなが一つとなり、共同活動をするうちに、お互いの付き合いが深まり、影響し合いながら、言語習得のみならず、人間関係、自分への認識、考えの確立なども成長していく場であると捉える。ただ、教師として、総合の捉え方に基づいた自分の教育理念をクラス活動の形で学習者に呼びかける以外、学習者に自分で総合の意義を捉えるという空間を与えることも大事だと思う。学習者に総合を自分の体で感じ、自分なりに意義を捉えてほしいからである。

4. おわりに

今回の総合の実践研究では、私にとって一番意味が大きかったのは、対話の意義を理解できたこと。動機から対話を経て最後のレポート作成に至る作業では、思考と表現の往還で自分の中にある「考え」(＝価値観＝文化)という原石を磨くことによって、その考えをつぶし、新しい「考え」を再生成したり、再確立することができる。この大事なことを思い出せて、自分との戦いに向かい合えたのは、実践研究で実践のメンバーと何でも分かち合える、何でも議論できるという場を提供してくれたからである。私にとって、この実践研究は総合と同様、私はこのコミュニティにいる仲間たちが影響し合う中で成長した気がする。今回の実践研究を通して、私が経験した理想的な総合はただ偶然ではないことを確信することができた。総合の可能性は自分で作り上げていくものである。この貴重な三ヶ月を一緒にお付き合いしてくださった皆さんに、心から感謝を申し上げます。

(リン イッセイ 修士課程1年)